

蝶の博物詩

生態37

産卵5



ツマベニチョウ (ギョボクの芽に産卵)
(2005年11月30日 石垣島)

photo by

Nishiyama



ミドリヒョウモン (アカマツの幹に産卵)
(2000年9月22日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態37

産卵5

多くの種類の母蝶は、幼虫の食草の若葉の表面に止まり、腹部を弓^{なり}形に葉裏に曲げ、1個ずつすばやく卵を産みつけて、次の場所に移っていく。葉の裏面に産卵するのは、卵に寄生する天敵のタマゴバチの眼を避ける本能的行動かもしれない。

蝶の幼虫に寄生するコバチには2つの種類がある。1つは、モンシロチョウなどの幼虫に自分の卵を産みつけ、孵化したハチの幼虫が蝶の幼虫の内臓を食べ、やがて体表に這い出て数十個のマユを作るのでアオムシコマユバチ(小繭蜂)と名づけられた群である。寄生する蝶、蛾など種によって異なるので、日本だけでも500種以上のコマユバチが生息している。

もう1つは蝶の卵に寄生するタマゴバチの類で、体長1 mmに満たない。とても肉眼ではみつけれないが、ときにアゲハチョウの卵に寄生するキイロタマゴバチを発見できる。このコバチは産卵1日以内のアゲハチョウの卵にしか産卵しないようで、その数は約20個である。キイロタマゴバチの大きさはなんと0.4 mmであるが、顕微鏡で見れば、ちゃんと蜂の形態をしている。ついでながら世界最小の昆虫はアザミウマの卵に寄生するアザミウマタマゴバチで、体長はわずか0.18 mmである(安富和男)。

食草、食樹の若葉に産卵するものに次いで、新芽に産卵する蝶も多い。また卵で越冬するミドリシジミの類では、食樹のブナ科植物の休眠芽の基部やその近くに1個ずつ産卵するものが多く、その部位は種によっておのおの特徴がある。

一頭の母蝶が産む卵の数はモンシロチョウの場合、300個前後であるが、適切な場所を探しながら1個ずつ産むのはたいへんな努力であろう。これに対してタテハチョウの仲間はまとめて産卵するものがあり、とくに沖縄のヤエヤマムラサキは食樹のオオイワガネの葉裏に、数百個の卵を規則正しく塊状に産み、それらを保護するように産卵場所にとどまっている(本誌Vol.32 No.9)。母蝶に見守られない幼虫は孵化後間もなく餓死する。

昆虫の中でもカメムシ、ハサミムシは卵を舐めてカビや細菌を除去したり、一見気味の悪いムカデは1カ月以上飲まず食わずで卵を抱いていたりする。これに対してウスバシロチョウは食草以外の枯れ枝や草、石などに産卵し、ヒョウモンチョウの仲間では関係のない樹木の幹に産卵することもある。食草のスミレにたどり着くのに容易ではないと心配になる。

さらに無責任なのはコウモリガの仲間のキマダラコウモリである。秋の晴れた日、空を飛びながら、約1万個に及ぶ卵をばら撒く。孵化した幼虫は、種々の植物の幹で養分を吸う害虫である。当然羽化率は0.02%ときわめて低い。コウモリガは原始的な種で、^{こまごま}諺“下等動物の子沢山”が常識となっているが、むしろ生活環境と関係がある。動物の糞中に産卵するダイコクコガネなどは4個中3個が生育し、羽化率は50%を超える。

西山茂夫